

1. 運動器エコー・サマーキャンプ開催にあたって

昨今、整形外科分野において運動器エコーの導入が急速に普及しつつあります。高解像度の運動器描出に適した機器の出現も伴い、エコーは整形外科外来においてなくてはならない画像診断ツールとなってきているのは、言うまでもない現状かと思えます。



今回は当社が普段開催している運動器エコー活用の基礎を学ぶセミナーではなく、若手・ベテラン問わず、全国各地で日頃から運動器エコーをご活用されている先生方にご参加いただき、講師陣とのディスカッションを通じて“**運動器エコー診療**”を学ぶセミナーとして企画いたしました。

セミナー内では、参加者自身も日常診療の中からエコー画像を持ち寄り、症例報告を通じて共有することで、講師・参加者とのディスカッションから、新たな見識を得ていただくことを目指しました。

また、参加者にとっては知識・スキルの習得だけでなく、講師・参加者との新たな交流を生む場としても活用いただけるよう準備いたしました。

2. 講師紹介

■ 皆川 洋至先生（医療法人 城東整形外科）

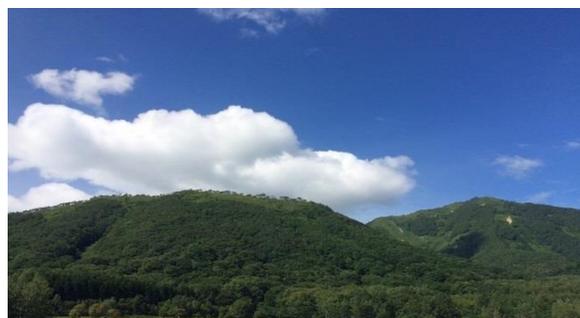
1964年生まれ。

1989年自治医科大学卒

その後、秋田県内の複数病院で勤務

2004年 秋田大学整形外科 講師

2008年 城東整形外科診療部長



日本の運動器エコー診療を牽引する第一人者。外来、手術、各地での講演等多忙な毎日を経過中、臨床現場から運動器エコー診療の進化を日々追求している。また、近年はアジア諸国での運動器エコー診療の啓発に力を入れ、日本の運動器エコー診療を世界へと発信している。

■ 服部 惣一先生（医療法人鉄蕉会 亀田メディカルセンター スポーツ医学科）

2004年 東海大学卒

2006年 亀田メディカルセンター救急科入職

2013年 スポーツ医学科勤務

救急科から整形外科に活躍の場を移し、運動器エコーを活用しながら臨床現場やスポーツ現場で日々診療に当たる。

また、7人制ラグビー日本代表チームドクターや海外での運動器エコーセミナーの講師など、国際的な活躍を見せる。

■ 笹原 潤先生（帝京大学 整形外科）

2003年 鹿児島大学医学部卒

同年 帝京大学整形外科入局

2011年 帝京大学スポーツ医学科センター 兼担

2011年に運動器エコーに出会い専門の足の外科を中心に、日々臨床において運動器エコー診療の活用を広げる。帝京大学の学生をはじめとしたアスリートに対し、運動器エコーを駆使したメディカルサポートを行っている。

3. セミナートピックス

≪皆川 洋至先生≫

①頸部神経根障害に対する新しい治療戦略

外来診療において、「頸が痛くて回らない」という患者様は多く来られると思います。頸由来の肩関節痛は、神経に由来していることはご存知でしょうか。（頸部神経根症）忙しい外来の中でも実践できる治療すべき神経の判定方法から、エコーを活用した神経根ブロックまで、エコー時代の整形外科医に必須のスキルを解説しました。

②腰椎疾患の谷間を攻める～外側大腿皮神経～

外来で見かける大腿部痛。特に、座位で症状の強くなる患者様は経験ありませんか？PLIF術後、妊娠後期の女性、子宮筋腫のある女性の生理時の痛み、、、これらの患者様が訴える大腿部痛に外側大腿皮神経の生食リリースが有効であったケースを元に、外側大腿皮神経由来の痛みの発生メカニズムを考えました。

③サイレントマニピュレーションの落とし穴

ペースメーカーを入れた痩せ形の患者様の一定数に凍結肩症状が出ることは、循環器医師の間では認識されている事実です。（しかし、五十肩で済まされています...）その様なケースで実際に肩関節痛を訴えて来院された患者様に、エコーガイド下神経ブロックを行い、サイレントマニピュレーションを施行した際に起こった“現象”を考えました。

≪服部 惣一先生≫

①膝窩部痛に対する関節外注射の実際

膝関節後外側の痛み、生食リリースを行ったことはありますか？実際に“効く”ケースは多く、即時的に痛みを取る上では非常に有効な場合があります。膝関節の解剖に改めて注目し、「なぜ効くのか」効果のメカニズムを考えました。

②絞扼性神経障害に対するHydrodissection

近年注目を集める生理食塩水を使用した“リリース”。筋膜リリースだけではなく、神経にも効果を発揮します。神経への効果は、「神経と軟部組織の分離」と「薬液を浸透させることでのブロック」と考え、Hydrodissectionの歴史を振り返り、実際に有効であったケースを解説しました。

③足関節外側靭帯損傷診断のピット・フォール

足関節捻挫で損傷する部位において、LTCL（外側距踵靭帯）を気にしたことはありますか？CFL損傷を起こしている症例には合併している可能性も考えられます。実際に来院されたスノーボーダーズフラクチャー（距骨外側結節骨折）の偽関節症例や海外でのシステムティックレビューから、LTCLの損傷例を考えました。

≪笹原 潤先生≫

①アキレス腱部痛の落とし穴：足底筋腱障害

知らない気付かない「足底筋腱」。大学陸上選手のアキレス腱実質部内側痛に足底筋腱損傷が影響しているケースを、実際のエコー画像で診断のポイントを確認するとともに、筋膜リリースの治療効果を解説しました。

②足関節捻挫のエコー診療：見過ごしてはいけない第3腓骨筋腱損傷

足関節捻挫のエコー診断。ATFL、CFL、AITFLと描出したエコー画像に“何か”が見えるかもしれません。レントゲンには決して写らない症状に気付けるかどうか。意識することで必ず見えるようになります。第3腓骨筋腱損傷がATFL損傷に合併しているケースは意外に多いかもしれません。今後の気づきにつながる症例を解説しました。

③ランナーに生じる後脛骨筋腱症：脛骨疲労骨折との鑑別

脛骨疲労骨折？しかし、疲労骨折のエコー所見が写らない下腿遠位内側部の痛み。陸上選手に多くみられる本症例を、実際に経験したケースを元に解説しました。エコーだから分かる、分かるからこそ即治療につながったケースを、現場で活躍するスポーツドクターとして解説しました。

4. 症例検討会 -当日の様子-

参加者には、日常診療の中で「エコーだからこそ判断がついた症例」「エコーでの判断に困った症例」「珍しいエコー所見」等のエコー画像をご準備いただき、当日持参していただきました。



発表後は講師・参加者とのディスカッションを通じ、日常診療への新たなヒントをつかんでいただく場となりました。また、情報交換会でも参加者・講師入り乱れ、夜遅くまで活発なエコー談議が交わされました。



開催中の2日間を通して、講師・参加者同士のコミュニケーションも深まり、非常に密度の濃いセミナーとなったのではないかと感じます。

5. 参加者・講師コメント

平田 正純先生 (AR-Ex尾山台整形外科)



現在の日本の最先端のエコー診療に触れることができ、大変感銘しました。また、講師の先生方の「患者さんをいかに治すか」という情熱も強く感じました。これからも、より一層患者様に信頼され、選ばれる医者にならなければならないということを強く感じた2日間でした。

下河邊 久雄先生 (久留米大学)



普段の診療でも、エコーを使用すると患者さんの反応がすごい良いということを実感しています。今回学んだことを活かし、これからもさらに活用していこうと思います。セミナーでは、講師の先生方の貴重な症例を見て考えることができ、大変勉強になりました。

金田 和麻先生 (なかざわスポーツクリニック)



エコーの知識・技術を身につけるだけでなく、講師の先生方が言われていたように、「患者さんのために何が出来るか」という考えをしっかりと持ち帰り、スタッフに伝えていきたいです。2日間、参加された先生方と色々とコミュニケーションを取れたことも非常に良い経験になりました。

笹原 潤先生（帝京大学）



今回のセミナーでは、一つ一つの症例を深掘し、みんなで病態を考えるということができ、非常に面白かったです。また次回も、みんなでエコーを見てディスカッションのできる企画ができればと思います。

服部 惣一先生（亀田メディカルセンター）



ご参加の先生方には、今回のセミナーで学んだ最先端のエコー技術を、「現場の診療でアウトプットすることで、さらに診療レベルを上げる」という良い循環を築いていただければと思います。

皆川 洋至先生（城東整形外科）



エコーを使用しての整形外科外来では、もはや診断では意味がなく、“**診断**”して即“**治療**”につなげる“**診療**”が大切です。診断から治療まで1人の医者が受け持つ日本の診療スタイルだからこそ、運動器エコー診療は最大の効果を発揮します。

「エコーを外来で使い、患者さんから学ぶ」日々の外来の中で運動器エコー診療のスキルを高め、世界No.1の整形外科診療を実践していきましょう。

6. 次回開催に向けて

2日間にわたる運動器エコー・サマーキャンプは盛況の中、終了いたしました。

ご参加の先生方には、“整形外科医にとってのエコー”という存在は、単に診断ツールとして使用するだけでは意味がなく、“**診断**”して即“**治療**”につなげる“**診療**”まで実践することで、今までの外来を劇的に変えるということがご理解いただけたかと思います。

今後とも運動器エコー診療の更なる普及につながるイベントを企画・実施できるよう、次回に向けてアップデートに努めて参ります。

運動器エコーキャンプにご興味いただける方は、是非次回開催時にはご参加いただけますと幸いです。また、日々の運動器エコー診療において、当社にてお役に立てる機会がございましたら、是非お声掛けいただけますと幸いです。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

